



佳作

書評 会田雄次著『アーロン収容所 西欧ヒューマニズムの限界』

(中央公論社 1962年)(中央新書・文庫コーナー: 中公新書3ほか)

文学部3年 折田吉宏

2013年度の本屋大賞受賞作である『海賊と呼ばれた男』の主人公は1945年の敗戦直後に勇ましい程に前向きに事業へ乗り出すが、それとは対照的な終戦を迎えた男達がいるのを知っているだろうか。

本書は太平洋戦争で英軍の戦争捕虜になり、後に京都大学にて歴史家になった会田氏が、当時のことを振り返って執筆した回顧録である。会田氏が所属していたのは弱小と知られる「安」師団である。彼らは陸軍の命令の下、マレー半島のジャングルの奥地へと進み、ろくな装備や物資もないまま大英帝国軍と対峙していた。スコールによって作られた泥沼のおかげで硬直状態にはなっているが、雨が上がって敵部隊が動き出したらもうだめだろうという絶望的な状況—そんな折に日本政府がポツダム宣言の受け入れを表明する。命を長らえた事に安堵する彼らはイギリス軍へ投降しビルマで日本への船を待つ。しかし無情にも彼らが送られたのはアーロンにある戦争捕虜収容所であり、会田氏が日本の土を踏むことができたのは終戦を迎えてから約2年も後のことである。

太平洋戦争というと反射的に真珠湾から始まる対アメリカとの戦いを連想してしまい、大英帝国と争っていたことはあまり意識されてはいない。加えて戦後の兵士帰還問題となればシベリア抑留があまりにも有名である。もしこの本が世に出されなければビルマで終戦を迎え、英軍捕虜として過ごした日本人の存在は風化してしまっただろう。

しかし本書には歴史的な意義とは他に、戦友から面白過ぎると揶揄されるほどに引き込まれる魅力がある。当初は劣悪な環境だった収容所も、盗みや煙草等を媒介にした闇取引を繰り返してゆくうちに次第に文明化してゆき、しまいには舞台衣装などをこしらえて劇を演じるに至るエピソードはおおいに爽快である。また、実体験に基づいたイギリス人、インド人やビルマ人についての考察も、程良く個性付けされているのでタイトルからは想像できないほど読みやすいものになっている。

とはいえ一貫して雰囲気は虚無的かつ退廃的だ。どんなに盗みが上手くなったところで彼らが本心から気が紛れる事などないのである。手紙や新聞といった様々な情報から故郷は焼け野原であると知り、家族や友人も死んでしまっているかもしれないという不安が頭をよぎる。それでも生まれ育った国に帰りたいという気持ちは「望郷という思いでは生ぬるい。兵隊たちは狂乱したように故国を思っていた。」(P226)と強い言葉で書かれている。実用性のある能力が求められる捕虜生活において会田氏は「インテリはあわれである」(P34)と自虐的に語るが、忘れ去られかけていた収容所の人々の思いを現代へ伝える仕事は会田氏の鋭い観察眼と使命感があったからこそ可能であったように思う。

なお続編にあたる『アーロン収容所再訪』は一般の本屋にはなかなか置いていないが書庫に蔵書があるので、是非大学生のうちの一読する事をお勧めする。